

無知であることに気づかされて

私は、同和問題を学ぶことなく教員になりました。「差別は許されない」「人権は大切なもの」は当たり前、「そんなこと、わかっている」と考えていました。今思うと、何もわかっていなかったのです。

忘れられないこと

30年以上前の出来事です。初任者教員である私のもとに、他の地区より転入生がありました。理由があって親元を離れ、筑紫野市の親戚にあずけられたのです。

ある時、私は実家を訪ね、お母さんに訴えました。

「この子のことがかわいいたら、そばにいてください。」
「仕事なら、筑紫野市の方がいいと思いますよ。」

ずいぶん悩まれたようですが、お母さんは、しばらくして、子どものもとに來られました。私は、自分の思いが伝わった気がしてうれしい気持ちになりました。

卒業の日、久しぶりにあったお母さんから、卒業のお礼とともに次の話がありました。

石橋さんは、いつも優しく私を迎え、自分の人生経験を話してくださいました。

自分が子どもの頃、学校で「Aむらのもん」とか言われたりしていじめられることがあった。だから、だんだん学校に行けなくなった。同じむらの子は同じような状況だった。それで、勉強がわからんようになり、読み書きが身につかんかった。

大人になっても差別はあったが、文字の読み書きがうまくできない分、人の話を全部頭に入れ、仕事や隣所のつきあいを大事にしてきた。おかげで、頼ってくれる人が多いのが、自慢ばい。

そやけど、これから子どもたちには、自分と同じような苦労をさせたくない。だから、子どもたちのことを頼んぐべし。

石橋さんは、部落差別によって学校に行けず、そのために文字を身につけることができなかったのです。

私は、自分の生きざまを語られる石橋さんのまなざしや言葉から、差別は人の生活に大きな影響を与えるものだと気づかされ、心の底から同和問題を解決していかねばと思えるようになりました。

あの時、先生が何回も誘うので、筑紫野に行ったんよ。そして、近くの食堂で働いたんよ。

私、文字が書けないんで、注文取る時にかかわれた気がして、恥ずかしい思いをしたんよ。その時、もう、ここにはおれんと思ったんよ。



無知であった私は、お母さんを傷つけていました。

そういえば、学校に提出するプリントは、いつも生徒本人が書いたものでした。しかし、その頃の私は、差別や貧困などの理由から「文字を書けない人がいる」ということもわかっておらず、相手の状況に思いを寄せる人権感覚も持ち合わせていなかったのです。

識字学級での出会い

私が参加した地域の識字学級は、差別や貧困で学ぶ機会を奪われた人たちが、文字を取り戻し生活を高めるための学び合いが行われていました。そこで石橋さん（仮名）に出会いました。

人を大切にできる人間になるために

お母さんの言葉と石橋さんの言葉が私の中で重なり、あの「忘れられないこと」を石橋さんに伝えました。石橋さんは、私の話をじっと聞いて、優しく言葉をかけてくださいました。

お母さんが先生に事情を言ってくれたのは、何でかね。先生を信じていたからじゃないかな。

きちんと知ってもらって、子どもたちのためにがんばってほしいからだと思います。

私は、転入生のお母さんや石橋さんとの出会いを通して、無知であることで人を傷つけてしまうことに気づかされました。

同和問題についても無知でいることはできません。同和問題の解決のためには、この問題を正しく知ることや自分のこととして考えることが何より大切だと思います。

私は、今も、学び続けています。

